

岩手県十四世紀禅宗の仏像彫刻について

—— 三例の紹介を兼ねて ——

田 中 恵*

(1990年9月25日受理)

は じ め に

南北朝期の仏像は、鎌倉時代までの仏像のような造形としての自立性に欠けるためか、造形史のうえでは、これまで余り問題にされなかった。それゆえ、一つ一つの作品について十分な批判がされてこなかったことも多い。北東北の曹洞宗の有力寺院である正法寺でも釈迦三尊像(本堂脇壇安置)の様に、14世紀末の正法寺の規模拡大期に仏殿の本尊像として造像されたと考えられる由緒正しい像であり、明徳3年1392の紀年銘を持ちながら、同時に胎内に記される修理の紀年銘享祿3年1530の存在によって、かえって造像期を下げて考えられてきた例すら見られるのである(註1)。

近年、禅宗にかかわる造像が地方の造仏史上に「美的な仏像」を大いに普及した意味を持つと私は考える様になった(註2)。ここでは岩手県の14世紀の禅宗関係の仏像彫刻について、造像例を挙げつつ、背景にもやや触れながら考察し、諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

1 岩手県の十四世紀の造像例から

(1) 普門寺の伝聖観音菩薩坐像について

岩手県指定文化財でありながら、再興の銘文を持つために、かえって造像期を室町後期まで下げて考えられてきた作品がある。

沿岸南部の陸前高田市米崎町の普門寺の伝聖観音菩薩坐像がそれで、胎内に室町後半の紀年の再興銘文(後の所見欄参照)を持ち、『岩手県文化財図録』では造像期をその時としている(註3)。現在、その像を所有する寺院が普門寺であり(普門は観音を意味する)、本尊像であるためか、寺では観音像として祀られてきたようである。

しかしながら、この後に述べる他の二像同様、この像は南北朝期の造像になる禅宗関係の像と思われる、尊名も当初はあるいは「宝冠釈迦如来像」として造立されたものであらうと思われる。この形式は、一般の如来像の頭上が肉髻・螺髪とするのとは異なり、宝髻を結び、宝冠を付ける形式である点が注目されるものである。この形式の釈迦如来像は、鎌倉時代から知られるようになるもので、禅宗と関わって造像される様になった形式の尊像である。北東北でも禅宗の布教と共に制作されるようになったものと思われる。

* 岩手大学教育学部

この像の造像期については、様式、形式、構造の点を総合して考えてみると、結論からいえば南北朝末頃、概ね14世紀末から15世紀初が考えられる。すなわち、様式の点では、顔、体軀、両脚部等に見られる、未だ全体に角張らないモデリングは、とうてい室町後半期に見られるものとは思われない。形制の点でも、禪宗系の宝冠仏としてはほぼ完好な様子を留め、殆ど崩れを示さない着衣形式や頭髮の様子は、室町後期の制作とすれば例外に属するものといえよう。最後に構造の点からも、頭体部を前後二材から彫出し、割首を施し、その内部はきれいに内刳を施す（両脚部材は一材からなるが、同様に丁寧な内刳が施されている。）もので、特徴的な部分には、上記に加えて、体部前面材では地付きに至る束と背面材との連結を意図する木柄を彫り残すことと、同様に背面材からも前面材との連結を意図する柄を彫り残すことが挙げられる。これらも南北朝期の像から見られるようになるものとして知られる手法であるから、この造像を県指定の見解の様に、室町後半と考えることには否定的にならざるをえない。これらの点を素直に把握するならば、銘文を、その内容のままに再興時のもの（銘文の記される部分には、明らかに当初の肌を削って処理をした上に記された形跡が残る）と考え、造像は南北朝～室町初期に遡ると考えるのが妥当と思われるのである。

次に、この普門寺の由緒とその周辺について少し触れておく。まず、『角川日本地名大辞典・岩手県』（角川書店）『岩手県の地名』（平凡社）（以下、「事典類」としたときはこれらからの引用）から「普門寺」の項の概要を転載して参考につすことにする。

普門寺は陸前高田市米崎町にある寺。曹洞宗。山号は海岸山。本尊は聖観音。寺伝によると、もと臨済宗で仁治2年1241榮西禅師の弟子記外和尚が南海より、この地に着船して開山したという。明応3年1494（享徳元年1452永正年間1504～21とも）稗貫郡大興寺十世如幻充察和尚が曹洞宗として中興開山し、檀那は千葉宗綱と伝えられる。天正19年1591、慶応3年1867に火災に会い、堂宇、文書などを焼失したという。

この普門寺のある現在の陸前高田市の14～15世紀の宗教的環境を再び「事典類」からみておく。陸前高田市の寺院としては、伝承上でも、慈覚大師開基を伝える観音寺（註4）や仁和4年888開基の金剛寺等平安初期にまで遡るものももっとも古いと考えられるが、それに次ぐのが、この普門寺の仁治2年1241である。その後、南北朝期の永徳・至徳年間に、光照寺、華藏寺が創建している様である。その後の発展では16世紀後半からかなりの寺院が創建されていることが知られるのである。ところで、この地方の政治史を考えると、鎌倉末期の正和4年1315に葛西氏の被官千葉広胤が鶴崎城（陸前高田市矢作）に来往したことが重視される。この後室町後期に至るまで、千葉氏の勢力がこの地方を支配したからである。この背景を考えれば、この普門寺の伝聖観音坐像が造像されたと考えられる南北朝後期から室町初期にかけての時期は、新しい勢力が力を持った時期であったのである。より古い由緒を持つ普門寺が改宗されたことも、又その時に新しい造像が行なわれたことも考えられてよい時期と思われるのである。この様に考えるならばこの造像は、遅くとも曹洞宗に改宗されたと伝えられる15世紀末を下限として考えられることが出来ようか。その時とすれば、新しい普門寺のシンボルとして、仏堂の本尊として造像されたものであろうか。しかし、その年代はやや様式等からすれば遅すぎると思われ、その場合はそれ以前の由緒のある像の転用とも考えることも出来ようか。

なお、今回紹介する諸仏に関して、造仏が行なわれた場所については、現在まだ未解明の部分が多い。すなわち、後に述べる様に、水沢の正法寺の諸像の様に概ね岩手の地に制作地を求める

ことが可能と思われる像もあるから、様式的に洗練されているからという理由だけで、この類いの造仏を中央の仏所によるものということもできない。しかし、関東の例では、京都の仏所の制作になると考えられる作品が、「林下」禪との係わりで存在し、それが東北でも可能であるとも考えうる。この辺りの考察は、この類いの造仏に関して、今後の課題の中心となる一つであろう。

以下、調書の形式で概要を述べておく（図版1～8も参照されたい）。

＜所有者・所在＞普門寺

＜住所＞岩手県陸前高田市米崎町

＜尊像名＞伝聖観音菩薩坐像

＜材質・構造＞木造漆箔、ヒノキ材寄木造、玉眼嵌入、内刳を施す、地付きから4・5分のところに6・8分の前後を連結する束を造りだす。木寄せは、頭体部前後刳割首（或いは頭体部別材で差首か）、髻は別材、両肩から下別材刳付、手首は別材差込、両脚部、裳先横別材刳。現状では、胎内は黒漆塗り、材の刳付け部は布漆をする。

＜像容＞髻を付け（二段に髻を結び、上部から垂髪する）、天冠台を付け（天冠台は波うち左右前部で髪が絡む、耳上の花飾りから髪が出る）、地髪は毛筋彫、白毫玉眼嵌入（玉眼は瞳を黒、その中に黒点、外側に朱線、当初のものは左が外れる）、髪耳を亘る、耳朵環状、人中は鼻下のみ、三道彫出（殆ど刻線のみ）、大衣を通肩につける。禪定印を腹前で結び、右足を前にして結跏趺坐する（両足共に衣に隠れる）。大衣の腹前の上に、裙の上端が見える（二本の紐とその下の裙の皺がやや刻される）。

＜仕上＞漆箔

＜修理＞欠失～白毫、左上瞼一部、
後補（上述を除く）～印相部

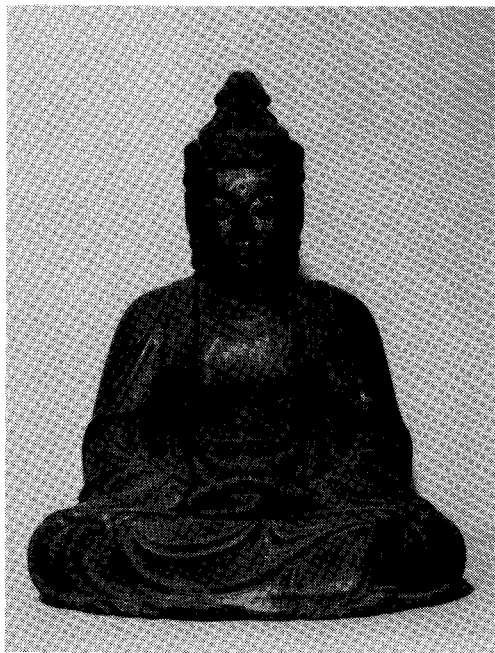
＜銘文＞両脚部裏墨書銘（削った面に）＝再興銘？＝縦書

「再興檀那中務大輔宗綱為親父一鏡老母
貞春 又大和田安藝守老母空室大一年
又金丹波守為老母中山□同中当□祐□
同対屋

住持充察代仏師受清

于時永禄二年（1559）己未秋冬」（カッコ内筆者）

＜法量＞	総	高		：66・0	腹	奥		：17・8
	像	高		：55・3	肘	張		：34・8
	髪	際	高	：43・5	膝	張		：41・3
	頂	～	顎	：23・8	膝	奥		：29・3
	髪際	～	顎	：12・0	像	底（幅）		：38・6
	面	幅		：10・6		（奥）		：34・2
	耳	～	耳	：13・2	根	幹	材（幅）	：16・8
	面	奥		：14・5			（前面材奥）	：8・0
	胸	奥		：15・2			（背面材奥）	：11・0



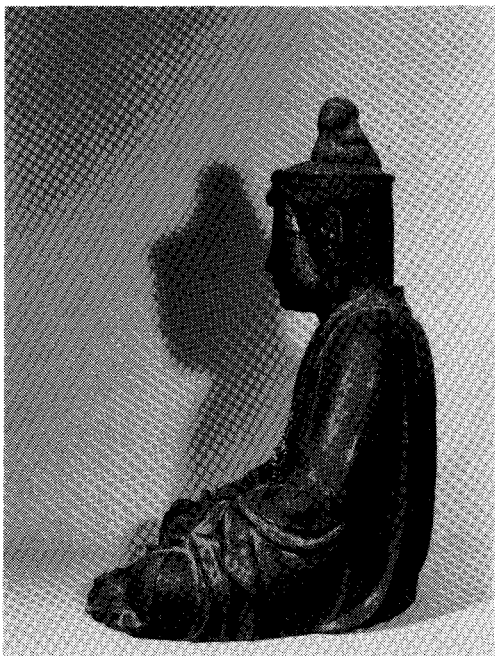
図版1 普門寺伝聖観音菩薩坐像 正面 全身



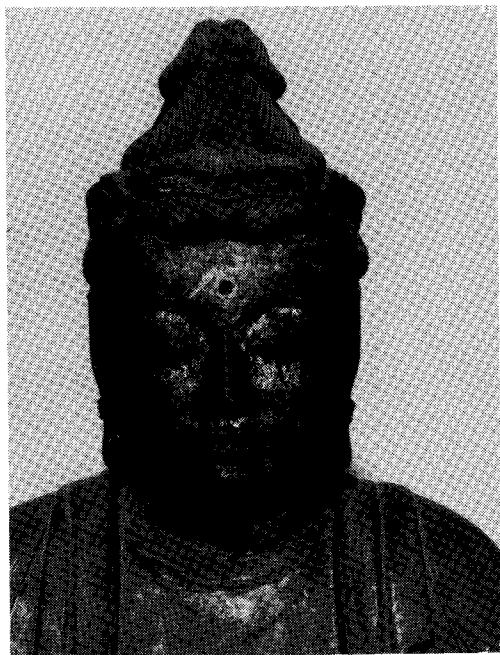
図版2 同前 斜 全身



図版3 同前 右側 全身



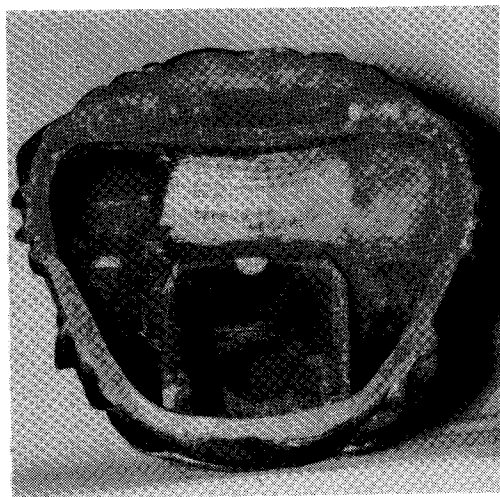
図版4 同前 左側 全身



図版5 同前 正面 頭部



図版6 同前 背面 全身



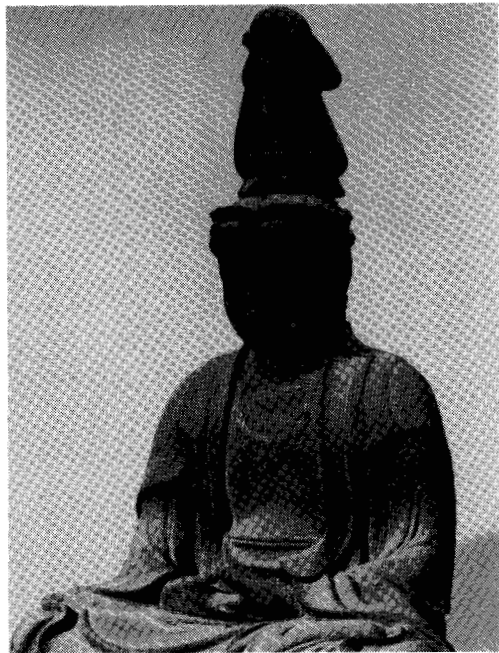
図版7 同前 像底



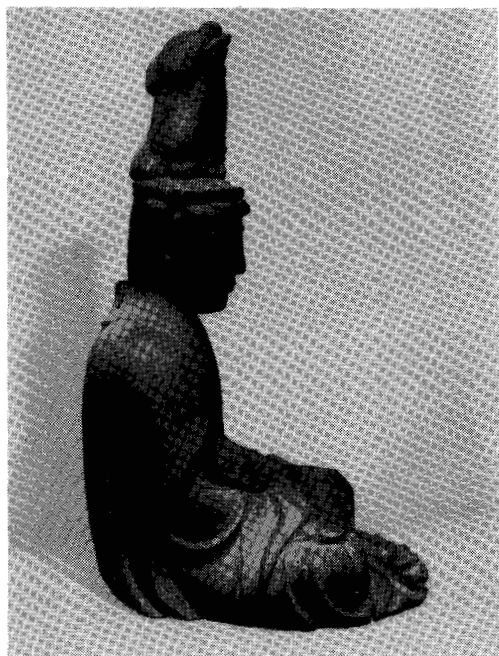
図版8 同前 銘文



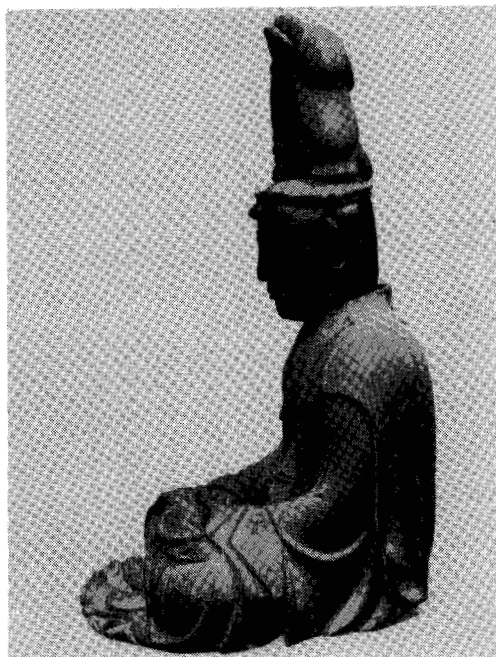
図版9 長興寺伝聖観音菩薩坐像 正面 全身



図版10 同前 斜 上半身



図版11 同前 右側 全身



図版12 同前 左側 全身



図版13 同前 正面 頭部



図版14 同前 背面 全身



図版15 同前 像底



図版16 毛越寺菩薩形坐像 正面 全身



図版17 同前 斜 全身



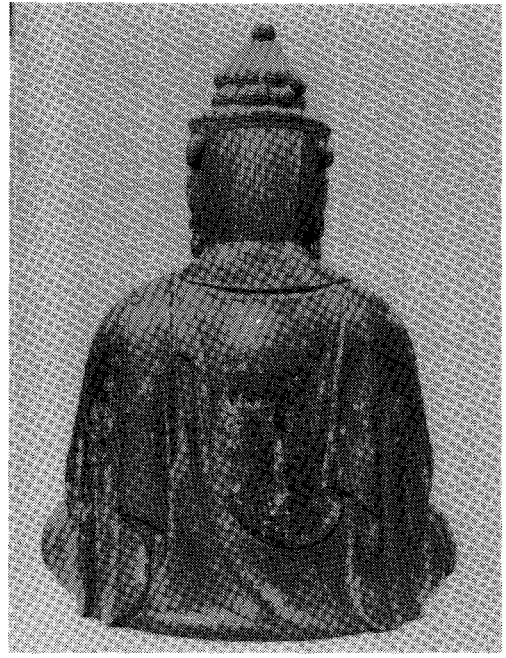
図版18 同前 右側 全身



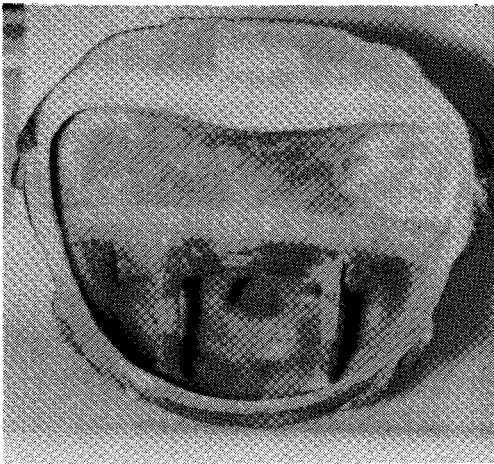
図版19 同前 左側 全身



図版20 同前 正面 頭部



図版21 同前 背面 全身



図版22 同前 像底

(2) 長興寺の伝聖観音坐像について

陸前高田市の普門寺同様、ほぼ南北朝末頃の造像になるとされる禅宗関係の像が他にも岩手県には未指定で何体か知られる。その中には、紀年銘を持つ水沢正法寺関係の像も含まれ、それらについては、既に簡単な紹介を試みたことがあるのは前述の如くである（註5）。ここでは、今までそれほど重視されてこなかった像について紹介し、正法寺関係の造仏に代表される禅宗の造仏が、単に正法寺だけにとどまったものではなかったことを考えたいと思う。

まず、九戸村の長興寺の伝聖観音坐像である。この像については既に、『一戸町の仏像』（一戸町教育委員会）において簡略な紹介を行なったが、ここでは今少し詳細に紹介し写真とともに示しておきたい。この像は頭上の髻を後補する為、全体のバランスが悪く見られる像であるが、細部の技工は堅実なもので、先の普門寺像同様、南北朝末期の制作を考えて良い像である。この像も寺伝では、聖観音とされるが、普門寺像同様禅宗に見られる宝冠釈迦如来像と考えられる像であり、禅宗の布教に伴って、この岩手の最北の地にまで造像されたものと考えられる（註6）。

長興寺についてもまず、「事典類」によって、概要を示しておく。

九戸郡九戸村長興寺にある寺。曹洞宗。山号は鳳朝山。本尊は聖観音。九戸氏の菩提所と伝えられ、永正元年1504（永正年間とも）加賀宗徳寺四世大陰惠善和尚を開山として創建、檀那は九戸右京信仲。九戸政実のとき九戸家が滅亡して衰退。元禄6年1693山火事で類焼し、一切を焼失した。

さて、周辺の歴史に目を転じれば、「事典類」から次のようなことが知られる。長興寺のある九戸村は、岩手県北部を戦国期に支配した九戸政実（天正19年1591南部直信と豊臣秀吉に滅ぼされる）を生んだ九戸氏の出自の地であり、南北朝期には、白河結城の結城親朝が支配したことが知られる（その後は南部氏の勢力が徐々に浸透したようである）。九戸氏の出自についても、南部氏（初代の五男五郎行連という）とするものと結城氏関係とするもの（結城親朝の侍大将（代官）小笠原政康）があるというが、何れにしても、南北朝がこの地方の政治文化にとって、重要な位置を占めることを示すものといつてよいであろう。この像はほぼこの時期に造像期を比定出来る像であり、この地方を支配することになった勢力のシンボリックな位置を持って造像されたものと想像することも可能と思われる。

この像についても先の普門寺像同様、寺伝による創建よりも造像が遡ると思われるから、当初の所在はこの像もよく判らない。しかし、造像当初からこの地域に存在した由緒正しい像と考えることも出来ると思われる。

これも又、以下、調書の形式で概要を述べておく（図版9～15を参照されたい）。

<所有者・所在>長興寺

<住所>岩手県九戸郡九戸村長興寺

<尊像名>伝聖観音菩薩坐像

<材質・構造>木造漆箔、ヒノキ材寄木造、玉眼嵌入、内刳を施す、地付きから少々上のところに前後を連結する束を造りだす。木寄せは、頭体部前後刳割首、両肩下から別材刳付、印相部別材差込（後補）、髻は別材（後補）、両脚部、裳先横別材刳。現状では、胎内は黒（墨？）塗り、材の刳付け部は布漆をする。

<像容>髻を付け、天冠台を付け（天冠台は波うち左右前部で髪が絡む、耳上の花飾りから髪が

出る)地髪は毛筋彫,白毫玉眼嵌入,髪耳を亘る,耳朵環状,三道彫出(殆ど刻線のみ),金属製の胸飾を付け(後補),大衣を通肩につける。禅定印を腹前で結び,右足を前にして結跏趺坐する(両足共に衣に隠れる)。大衣の腹前の上に,裙の上端が見える(二本の紐とその下の裙の皺がやや刻される)。

〈仕上〉現状は彩色像で盛上げ彩色も見られる(後補)。

〈法量〉像	高	: 62・5	腹	奥	: 18・0
	頂	〜 顎	肘	張	: 32・5
	髪際	〜 顎	膝	張	: 40・6
	面	幅	膝	奥	: 28・6
	耳	〜 耳	地	付(幅)	: 39・5
	面	奥		(奥)	: 36・0
	胸	奥	根	幹 材(幅)	: 16・5

(3) 毛越寺の菩薩形坐像について

最後の例は,毛越寺の宝物館のなかにある菩薩形坐像(寿徳院蔵)である。この像については,奈良国立博物館の毛越寺の宝物調査のおり,既に調査されているもので,簡略な調書も存在しているが,今回新たに調査を行なったので,写真と共に,概要を述べておこうとするものである。

この像も,先の二例と同様,宝冠釈迦如来坐像と考えられる例で,その点,禅宗関係の造像が推測される例である(註7)。制作期も,形状と同様特徴ある構造(前後二材矧ぎから前面材で地付きまでの束を作り出し,前後材を繋ぐ束を彫り残す)をも示しており,前の二例同様,ほぼ南北朝最末期から室町時代初期頃に比定されと考えられ,この頃の造仏の様子を考える資料として取り上げるものである。なお,様式に関していえば,この像はやや硬さのある表現が支配しているように見え,制作の実年代は,前二像に比べてやや下がる室町初期に考えるのが妥当であろう。

いうまでもなく,毛越寺は奥州藤原氏以来の天台宗の寺院であり,この像がこの寺に当初から存在した由緒ある像とは考えにくい。しかし,岩手県の何れかの寺から流れ出た像である可能性は高く,この寺の周囲の造仏の様相を考えるうえで重要な作品と考え,一応ここに取り上げておく。この像が存在していることにみられる様に,この時期の作品がかなりの数この北東北に存在していることはそれ以前の様相とはかなり異なっていることが考えられるからである。

これも又,以下,調書の形式で概要を述べておく(図版16~22も参照されたい)。

〈所有者・所在〉毛越寺寿徳院(毛越寺宝物館所在)

〈住所〉岩手県西磐井郡平泉町

〈尊像名〉菩薩形坐像(宝冠釈迦如来坐像)

〈材質・構造〉木造漆箔,ヒノキ材寄木造,玉眼嵌入,内刳を施す,地付きから少々上のところに前後を連結する束を造りだす。木寄せは,頭体部前後矧割首(面部は更に一材を矧ぐか),左右両肩下から別材矧付,印相部別材差込,髻は別材,両脚部,裳先横別材矧。膝上の袖口それぞれ別材。

現状では,胎内は黒(墨?)塗り,材の矧付け部は布漆をする。

＜像容＞髻を結び（頂上から三段十房にして垂髪）、天冠台（上下を紐とし、間は無文）を付け（天冠台は波うち左右前部で髪が絡む）、地髪は毛筋彫、白毫（水晶）玉眼嵌入（玉眼は中央に黒目、周囲に朱、他は白）、髪耳を亘る、耳朵環状、三道彫出（殆ど刻線のみ）、大衣を通肩につける。禪定印を腹前で結び、左足を前にして結跏趺坐する（両足共に衣に隠れる）。大衣の腹前の上に、裙の上端が見える（二本の紐とその下の裙の皺がやや刻される）。

＜仕上＞現状は古色を呈す。

＜後補＞頭部背面材一部は修理の際交換する。玉眼。

＜法量＞像	高	: 64・5	肘 張	: 38・0
髪 際	高	: 49・5	膝 張	: 48・5
頂 ～ 顎	: 28・0	膝 奥	: 32・8	
髪際 ～ 顎	: 13・5	膝 高	: 8・6 (右)	
面 幅	: 12・0	地 付 (幅)	: 44・5	
耳 ～ 耳	: 15・5	(奥)	: 39・5	
面 奥	: 16・0	根 幹 材 (幅)	: 19・5	
胸 奥	: 16・8 (右)	(前面奥)	: 8・0	
腹 奥	: 21・0	(背面奥)	: 12・0	

2 14世紀の北東北の造像について

以上三体の像について、簡単な紹介をしてきたわけであるが、次に14世紀のこれらの彫刻についての注目すべきことについて付け加えておきたい。それは、ここに見られる南北朝期から室町初期に見られる、禪宗の布教に伴う造仏の様式が、それまでの在地の仏師による造仏を主体にしていた岩手の造仏環境にかなり大きな変化をもたらせたと考えられることである。またそれは、本来「造形をそれ程重んじていない」と従来いわれる禪宗の布教ゆえ、なかなかおもしろい問題を含んでいると思われるのである。

ここではまず岩手県の現存仏像に見られる都の仏師との係わりを鎌倉時代を中心にして見た後に、水沢市の正法寺の造寺と拡大に関わった仏師として名前が知られる「立増」をも含めて、この時代相を今少し考えておくことにしたい。

(1) 鎌倉時代の様相

北東北では平安後期も12世紀から、(平泉の諸寺に見られる様に)都からの仏師の移動を含む造仏が顕著になる。しかし、それは12世紀末の藤原氏の滅亡をもって終焉を迎えたわけではなかった。中尊寺一字金輪大日如来坐像(国指定重要文化財)や東山町二十五菩薩堂の諸像(県指定)等の12世紀最末から13世紀初頭の例にもまして、住田町光勝寺の阿弥陀三尊像(県指定)の様式と年紀「建保□年1211~13」の存在は、藤原氏の滅亡後もその活動が続いていたことを示すものである(註8)。また、更にその後のより新しい様式の像の岩手県での造像があったことも確認できる。その例をみておこう。

北上・如意輪寺の釈迦三尊像(県指定)は、低い肉髻や松葉状の衣褶に特徴付けられる鎌倉時代の慶派様式の像であり(註9)、13世紀の第一四半期に制作された前述の諸像とは異なった様

式を示す重要な像である。また、その所在がかつての（平安初期天安元年857以来の）定額寺の極楽寺の近辺であることから、新しい造像の様式が北東北にも伝わったことを示すと同時に、それが北東北の仏教拠点、平安期以来の定額寺においてであったことを示す点でも重要である。

この定額寺の周辺における造像については、鎌倉時代となっても、都とつながりの在った造仏の拠点であったことが、他の像からも知られるのである。花巻・延命寺の阿弥陀如来立像の胎内銘には、「(胎内前面梵字五行の下に墨書) 大仏師幸運同子息幸賢／奉造立三尺弥陀如来像一鉢寛元元年歳次癸卯十月廿五日願主正兼金剛仏子離愛三昧持者也／於江差郡偵岳寺奉造迄」(註10)とあり、寛元元年1243大仏師幸運等が現在の北上市の偵岳寺＝定額寺＝極楽寺(註11)にてこの像を造像したことが知られるのである。

この二例に見られる様に、この頃の極楽寺は造像工房がある程の有力寺院と考えられ、以前の平泉の場合とは違った形で存在した工房とも考えられようか（前述の二例は様式的に同一ではなく、同一工房の作例とは考えにくい）。すなわち、平安末期の平泉の財力による仏師の移住とは違った形の、北東北での仏師の動向を伝えるものと思われる。いかなる事情がそこに介在したかも不明だが、平安初期からの定額寺であった極楽寺が中世に至っても、造仏に関しても、（都の仏師が活動するような、それ故、都の様式と密接な関係にある）かなり中心的な寺院であったことを示すことは注目されるのである。

又、これに関連して藤原氏の滅亡以後の平泉も全く火が消えてしまった訳ではないことにも注目しておきたい。13世紀の第二四半期以後の作例を見ておけば、小金銅仏ゆえ後世の移動も考えられるものの、毛越寺の不動明王立像は鎌倉後期の制作が考えられる像であり(註12)、また、同時期の若女の面(註13)が中尊寺に残る等、彫刻の所在からすれば、鎌倉になってからも平泉もまだ北東北の中心的な存在の一つであったことが指摘出来るのである(註14)。

(2) 平安後期の様相

以上のように、平安時代以来続いてきた由緒ある寺院が鎌倉時代になっても、依然仏教の重要な拠点になってきたことが造仏の面からも知られ、そこには都の影響が強く存在することは肯定せざるをえない。それにもかかわらず、同時に大きく都とは違った造仏観が平安前期以来北東北には存在したことも指摘しておきたい。その点について次に平安後期を中心にやや整理して述べておきたい。

すなわち、新しい様式形式を中心に考察すれば、現在までに往々いわれてきた様に、北東北の造仏の背景には、（経済に恵まれた）奥州藤原氏や、国家と深いつながりのある「定額寺」等が平安鎌倉時代を問わず中心となっていたと考えざるをえない。すなわち、12世紀の藤原氏に関しては平泉の中尊寺金色堂などにある仏像がその象徴であろうし、「定額寺」に関しては（北上の極楽寺と関わるとされる）万福寺（立花毘沙門堂）の二天立像（国指定の重要文化財）が都風の平安後期の様式の伝達を示し参考となる（註15）。

これらの諸像の様に、都の様式をそのまま受け入れたことを示す像がいくつも存在することは事実である。しかし、平安時代の北東北の造仏の中心的な様式は、これらの都の優美さとは一線を画したものである。それは、都の様式にそのまま追従するようなものでは「感覚的にも」なかったと思われるものである。平安期の北東北の仏像を概観すれば、上述のような都の様式の影響を強く受けた仏像もいくつか存在するものの、もっと素朴で力強い（価値観が都の仏像とは異なった）造形を示す仏像が主流となっているとしたほうが適切と思われる。平安後期の（岩手県にも

多く残る)「鄙びた仏像」の最大の特色は、素材である「木」の持味をいかに発揮させようと意図するもので、多くの場合、造形の表現力には欠けることもあるが、「結果」は直感的に造形意図は納得できるものが作られている場合が多く、(その結果当然ながら)都の様式とは相反するところがあるのである(註16)。従来、その理由の多くを造形作家の能力不足と考えてきた(註17)が、能力だけの問題とは考えがたい。ここには、北東北の信仰が都のものとは異なっていたこと等、環境の相違が大きいことがまず考えられねばならないし、それを考えることで北東北に存在する「仏像」の意味そのものからして考え直す必要があると思われる(註18)。

しかしながら、鎌倉時代に入ると、上述の傾向はかなり急速に衰え、造形として魅力的な「鄙びた仏像」は姿を消す様に思われる。この現象が意味するものは未だはっきりとしないが、(北東北の仏像造形を支えてきた)造形に依った信仰が、この頃から(鎌倉新仏教を中心とする)宗教にとって代わられたと考えることも可能かと思う。仏像関係の資料としては、前述例に加え、13世紀中ごろの例として宝治2年1248の銘文を持つ(「千阿弥陀仏」を名乗る仏師の制作になる)阿弥陀像(水沢・栗林阿弥陀堂像=県指定)が存在したり、(藤沢町に見られるような)13世紀末からの念仏の流行を物語る資料(藤勢寺の阿弥陀如来立像他)の存在がそれを感じさせるのである。

(3) 禅宗に関わりつつ

これまでに平安末期から鎌倉時代中期までの諸状況に照らして岩手県内に残る仏像の表現の関係を見てきたわけが、鎌倉中期以降の仏像の表現については、論じることのできる資料が不足している。この状態の下で、南北朝期の後半になると禅宗寺院を中心として、この小論に取り上げた三体の像を始めとして、都風の様式を持つ仏像がかなり見られるようになる。そのあり方について、次に曹洞宗の北東北の拠点寺院である正法寺の造営に関わった仏師「立増」を中心に見てゆくことで整理しておくことにする。

北東北での有力な禅宗のひとつである曹洞宗(道元は林下禅の系譜を引く)の奥州への布教は、ちょうど南北朝期の頃から始まるといっても良い(註19)。特に奥州も北辺においては、後に拠点となる水沢の正法寺が重要である。正法寺の開山である無底良韶は14世紀の半ばに現在の黒石の地に来て、寺を開いた。その後、正法寺を実質的に拡大した月泉良印も無底良韶の没後まもなく正法寺に入り、本格的な造寺をはじめとして、様々な活動をはじめている。彼等の仏像に対する考え方は、それ以前に岩手県で活動した僧たちと、かなり異なっていた様である。

正法寺には現在も草創期の遺品が多く残っている。そのなかで、開山の無底良韶に係わる作品と伝えられるものについては、まず、現在の正法寺の本尊像である如意輪観音坐像(県指定)がある。その造形様式についてみれば、像は鎌倉後期の都の仏師の手になるものであり、由来について考えるときに、伝承をも参考として考えれば、無底良韶自身が入山の時に、自身に縁のある仏像を携えてきたものとして矛盾がないと思われる。今一つ、正法寺に伝世する作品を例にとれば、無底良韶の念持仏と伝えられる仏龕(小さな龕で愛染明王と不動明王を背中合わせに安置したもの)がある。これも実に精巧な作品で、当時の都の仏師の技量の確かさを示すものといつてよいものである(註20)。これらの像の存在は、無底が北陸の出身であり、師匠の峨山の指導によって奥州に布教を開始したこととも関わって考えられるべきであろう。すなわち、無底の所持品は、都(北陸)からもたらされたものであり、この地に禅宗(曹洞宗)を布教する意図で持ち込まれたものであると考えられるのである。

このように正法寺を開いた無底の評価を考えれば、仏像をはじめとする造形作品では、都の作品を上位におく考え方であり、また実際にそのような仏像を身近に置いているのが知られるのである。このことは、それまでの辺地の造像観からすれば大きな変化である。それは従来の北東北の仏像が、基本的に現地で制作されたものであり、その評価についても（鎌倉時代以降にかなり変化が見られるものの）、都の仏像を単に上位におくという考えだけではなかった状況であったことは上述した通りである。

又さらにいえば、このような著名な（文化的な）禅僧が「田舎」のさらに山中に造寺していることも注目される。それ以前の信仰（ここでは仏教そのものというよりはやや現世利益等を含む信仰の側面で把握したい）とは違った理念での造寺が正法寺では行われているのである。今少しそれについて述べれば、それは（原始信仰を基にして、農耕生産力を基盤として）、半ば自然発生的に成立したと考えられるそれまでの多くの寺院（や草庵）とは異なって、林下の禅は現在の地勢からみても「清浄地（註21）」であることを大いに意識（認識）して（註22）、その地に寺を開くという事情（註23）をもっているのである。すなわち、ここでは禅のなかでも「林下」と称される禅風を持つ（曹洞宗もその一である）禅僧たちによって、意図的に都（大寺という意味を含む）を避け、環境の良い地に寺を開いて修行する形態が、この状況と大に関わるからである。

地方に文化が自発的に花開くのではなくて、都などから見て「清浄地」であることが大きな目的となって、の展開であったと考えられるのである。この様な状況下で「田舎」に都風の仏像が安置される状況がもたらされたのである（註24）。

正法寺に関わる仏像について、この状況を更にもう少し後（月泉良印の代）まで見ておくことにする。正法寺に関してみれば、無底良韶の段階では殆どが都から持ち込まれた仏像であるのに対して、次代月泉良印の代になると、現地（ここでは水沢市黒石）での本格的な造寺が行なわれるようになり（註25）、現地で規模の大きな建物も造営されている。仏殿、祖師堂、等がそれである。この造営の時に活躍した仏師に「立増」がいる。「立増」は正法寺に現存する旧仏殿の釈迦三尊像や、祖師堂の開山無底良韶像、二世月泉良印像、三世道叟道愛像等の造像に従事したと考えられる仏師なのである（註26）。すなわち、正法寺創建の初期ばかりではなく、現地での大規模な造営が始まり、その寺を拡大してゆくなかでも、月泉良印は仏殿の仏像には都の様式の仏像を選択し、都で修業したと思われる仏師を用いて造営を行なっていることがここに知られるのである。これは、それまでの一般の仏寺（多くは一般の人の現世利益に支えられた「信仰」の寺である）の造営の様子とは随分と異なったやり方ではなかっただろうか。それまで多くは、在地の仏師を用いて本尊像を造るほうが一般的であったと思われるからである。

そこには、無底良韶・月泉良印等の様に宗派の中心地（曹洞宗の場合は能登であるがここでは一応それを都に含めている）で修行した禅僧が、「都で曹洞宗の寺院としてイメージしていた寺院像」が存在し、それによって実際の造寺を行いたいと考え、さらに又、それを実現させるための背景も存在したことを窺わせるのである（註27）。しかも、従前一般とは違って（註28）、禅宗の寺院の場合「寺院像をイメージしていた存在」は主導した僧侶であったはずである。この僧侶のイメージによって寺院が作られるときに、それまでとは違って、都の仏師が用いられる必然性も生まれたのではないだろうか。

ところで、この「立増」の造像活動を支えた経済力はどのようなものが考えられるのであろうか。「立増」がいかに信仰に支えられて造像に従事していたと考えても（それほど恵まれた経済性を要求してはいないとしても）、生活できるだけの財源が用意されていなければ、「立増」の様

な「都で修業した仏師としての腕を持った人物」を、長期間にわたって辺地に滞在させることは困難ではなかったかと思われる。しかも、経済力が地方の豪族の手によって可能になったところで、都の仏師が「田舎」に長期間滞在するものではないことも、此迄の事情が物語るところである（例外的に奥州藤原氏があるというものの）。ここにそれまでの造像活動の背景とは少々異なった状況（例えば仏師の活動が金銭のみによって成り立っているのではなくなったこと）を意味しているようにも思われるのである（註29）。さらに憶測すれば、岩手の場合、無底良詔や月泉良印等の寺院に関するイメージは師である峨山がいた能登でのイメージである可能性もある。また、それは都の禅寺院の可能性も否定はできないだろう。ここにおいて、仏師がそれまで都の作品が殆ど存在していないと思われていた北東北での活動に、自分の宗教的意義を見いだしたとすれば、僧と仏師が宗教的に結びついていたことをも考えさせるのではないだろうか。

ここに述べたことだけから直接的に、在地の造形観まで変化が直ちに起こったと言うわけにはいくまい。即ち、この「清浄地」を求めての「林下」禅の行動は一方で、在地の側からの要求と言うわけではないから、在地までを巻き込んでゆく様子も、それまでの信仰に基づいたものとは違ったものであったはずだからである。

これに関する銘文として、重要と思われるものを紹介しておきたい。それは、「立増」の作品の胎内銘でもある江刺の宝城寺の宝冠釈迦如来坐像のものである。まずそれを示しておく、
「(胎内胸部裏墨書) 時大仏師參河法時立増／開山月泉印公 (月泉良印) 大禪師／奉 造立釈迦形像一軀／大檀那住持月峯良燈／于時明德二二年 (1393) 癸酉仲冬日敬白」(カッコ内筆者) (註30) というものである。

ここでは、江刺の地に曹洞宗の寺院（正法寺の末寺）として開かれた宝城寺における（正法寺の月泉の高弟による造寺と）造像が（従来の様に在地の豪族（註31）の援助によって成されたわけではなく）新しい理念によっていたことが記されているからである。すなわち、月峯良燈は（月泉の曹洞宗の布教の一環として）宝城寺の草創にあたって、本尊を造像したわけであるが、その造像に関しての「檀那」はこの寺を開いた月峯良燈その人がなっているのである（註32）。この在り方はそれまでの仏像の造像の在り方とだいぶ異なるのである。又、仏師と僧（この場合は、月泉良印、又は、月峯のような曹洞宗の禅僧）、そして、その後援者（多くは在地の武士・豪族層である、正法寺の場合も陸奥の武士層がその後援者であった）の関係が従来とは異なった形で存在したことを想像させるのである。しかし、この状況が具体的にどのような状況であったかについては、まだ殆どわかっていないといってもよい（註33）。

とはいうものの、今回とりあげた三例の作品が示す都ぶりをを持った仏像の存在は、それまでの辺地の造像とは違った展開が（かなりの広がり方をもって）正法寺以外でも存在していたことを示すものであり、その実態についての把握は、岩手のみならず日本の宗教と造形の把握に重要な問題を提起しているように思われる。この変化の速度がかなり大きな問題である。現在では殆ど意味のない速度のように思えるがこの変化の速さは、ことが信仰の問題ゆえ、体制の変化として見れば、異常な速さであることが注目されるのである。

正法寺の事例にしても、それが曹洞宗の北奥羽の拠点寺院と見なされることから、未だ「地方の一特異例（拠点ならではの特異例）」であることを免れないが、今回提示した三例の示すものは、それが、この時代においては、必ずしも特別な事例であるのではなくて（都の仏師による造像という現象が、その意味で特別であることは変わりなかったかもしれないが、そのような造像現象が造寺・開堂と結びついて、必ずしも例外的な現象ではなくなったという意味で）、異常な速度

で陸奥全体に広がった点も含めて、普通の「田舎」の寺においてもあり得る例として、存在したことを証すものであるからである。

(この章については、スペースの関係で図版を掲載することが出来なかった。『岩手県指定文化財』岩手県教育委員会、『岩手の美術と文化』学習研究社、『仏像を旅する 東北線』至文堂等に掲載された図版を参照されたい。)

お わ り に

この現象をいかに把握すべきかは容易ではなく、また、結論も得ていない。したがって、この小考はその原点を考えるための資料提示をすることを目的とせざるをえなかった。しかし、それが「禅宗」という宗派の周辺で存在し、その思想的背景と関連して考えることは否定し得ないことと思われる。この問題は当然のことながら、岩手県だけの特異な現象ではないと考えられる。福島においては、既に14世紀の後半に活躍した仏師として「乗円」の名がよく知られ(註34)、また、京都から見れば「田舎」であったと思われる関東の(それも当時の中心であった鎌倉ではないことは注目されてよい)禅宗寺院に京都の院派の仏師の作品がかなり見られることなどはこれと同時に考えねばならない問題である。

今回扱った寺の宗派(曹洞宗)からすれば、その本拠である富山、石川県における寺院とその仏像に関わる考察が必要であることは間違いないであろう。今後に残された一課題である。また、特定の僧侶と仏師の関わりがどの程度であったかも今後の課題である。しかし、これらの点を含めて、今後、この問題は造形史・宗教史上でもより注目する必要がある問題と思われた。

以上、簡単ではあったが、今回紹介した南北朝を中心とする禅宗関係の諸像が持つ様式の特色をその宗教的側面との関連で考えた。諸賢の御批判を乞う。

— 註記 —

註1 この三尊像については仏師立増によって造像されたことを考えたことがある。「曹洞宗の北奥布教と仏師立増～その宗教史・美術史上の意義」(大矢氏と共著)岩手県立博物館研究報告第3号1985,『江刺の仏像』江刺市教育委員会(大矢氏と共著)1985,なお、岩手県立博物館図録『奥の正法寺』1987はこの仏師の活動についても触れているので参照されたい。

註2 拙稿「十四世紀院派仏師の造仏と林下禅―千葉円照寺釈迦三尊像と東光寺院廣銘僧形坐像を中心に―」MUSEUM469 1990

註3 『岩手県の指定文化財第一集』岩手県教育委員会1981,に「(像様を簡略に述べたのちに)胎内膝裏に、再興檀那中務大輔千葉宗綱が父の一鏡,母貞春の為,また,大和田安芸守母の十一年,金丹波守母等の墨書がある。また,永禄二年(1559)住寺充察,仏師,受請の銘があり,資料的にも価値が高い。」とある。

註4 過日調査をした観音寺等の仏像については、この寺の由緒と仏像の形制からの考察を雑誌『行動と文化』に「東北の慈覚大師開基伝承と仏像の形制」として投稿中。

註5 註1参照。

註6 前述した様に、様式から考えられる造像の場所については、現在まだ定まった考えを持たないが、様式・構造共に、都のものに近く、余り鄙びたところを見だせない。正法寺の様な場合を除いて、運搬された可能性も考えたほうが良いかもしれない。ただし、それは直接京都の仏所からとばかりもいえるものではないが。

- 註7 岩手県における禅宗における宝冠釈迦如来像のもっとも明らかな例は、江刺・宝城寺の宝冠釈迦如来坐像である。この像の胎内銘文には明德4年1393の年号と共に、その像が釈迦像であることが明記されており、この形式の代表的な例といえる（本文中の銘文参照）。なお、岩手の代表的な曹洞宗寺院である正法寺の仏殿の釈迦如来及び両脇侍像と考えられる像（現在は本堂脇壇に客仏として安置＝胎内銘によって、明德3年1392の造像であることが知られる）は、通常肉髻・螺髪像であるから、形式的には両者が用いられていたことが知られる。観察によれば、この正法寺の仏殿の釈迦像も、宝城寺の釈迦像の作者として知られる「立増」の手になるものと考えられるから、まさに、両者が作られていたことが知られるのである。
- 註8 この頃の造仏の動向については拙稿「中尊寺一字金輪大日如来坐像の周辺」岩手大学教育学部年報第46巻第2号1986、同「浄土のリアリティ（東山町の二十五菩薩像について）」『緑青』創刊号1990等参照されたい。
- 註9 この像については『江刺の仏像』参照。このことは様式に留まらず、司東氏がかつて見たという、納入品の慶派風の「五輪塔風の納入物（調査のときには確認できなかったが）」でも問題となろう。
- 註10 久野健『東北古代彫刻史の研究』中央公論美術出版による。
- 註11 この極楽寺は『文徳実録』天安元年6月3日条に陸奥の定額寺になったと記される極楽寺と思われる。鎌倉期頃には現在もその地名が残る様に、ジョウガクまたはテイガクと呼ばれたと思われ、銘文中の「偵岳寺」をこれと関わって考えるならば、この像が極楽寺、または、極楽寺付近の地に於いて造像されたことを示していると考えられる。
- 註12 拙稿作品解説『岩手の美術と文化』学習研究社1986、『東北地方の仏教美術の基礎的研究』科学研究費報告書1990等参照
- 註13 正応4年1291の銘文がある。
- 註14 金工作品にも、鎌倉時代の孔雀文髻（国宝）（建長2年銘1250）の存在など、平泉の鎌倉時代は無視できないものがある。また、歴史的に見ても、金色堂の鞘堂が（鎌倉、室町に）二度建立されるなど、かなりのものであったことが知られる。又、これに関連していえば、ここに見たように、藤原氏の滅亡以後でも、また、「定額寺」が実質的に機能しなくなってからも、造仏の中心としてこれらの寺院が存在したことは、単に都との経済や文化のつながりだけではない造仏の状況を示すものとして考えるのが必要であろう。従来の一般的な解釈の様に、経済面にだけ重点を置いた考察の安直さはそろそろ指摘されても良い状況と思われる。
- 註15 拙稿作品解説『岩手の美術と文化』学習研究社
- 註16 そのなかには、かえってその様な様式によったために食違いが露出してしまっている例の方が多いといえるような状態である。平安前期の作例が都の場合にも量感を優先させる様式を示していたためか、9世紀の黒石寺の薬師・四天王像の場合の様に、その様式に依りながらも、地方的特色がプラスの方向に振れている例もあるのに対して、平安後期の作品の中には地方的特色がマイナスの方向であるものが多く見られる。この対照は問題となろう。また、時にこの平安前期様式の残存が平安後期になっても見られることがあるが、（例えば、形式的には、天台寺の聖観音像の天衣形式や、造像様式では藤里毘沙門堂の兜跋毘沙門天像の量感など）、それが意図的なものであるか否かは、なかなか判断しにくい。上述の様々な事情が反映していることが考えられるからである。この辺りは地方の仏像の表現そのものの問題点としても今後より考察されるべき処であろう。
- 註17 美術史学は近代になって西洋からもたらされたものであり、日本ではそれをほとんど無批判に受け入れたため、矛盾が露呈しているところが少なくない。
- 註18 この問題については別に論じる問題としたい。ただ、この様な信仰の力が大きく働いた造形が見られるのが、殆ど平安時代も末までに限られることは、留意しておきたいことである。なお、この辺りの事情については、拙稿「秋田県の仏像～調査で出会った仏たち」『仏像を旅する 奥羽線』至文堂1989参照。

- 註19 陸奥南部に関しても、曹洞宗のみならず、臨済宗にしても（もちろんその系譜では林下禅の中峯明本の直系である古先印元の郡山・普応寺の創建は重要であるが、そのほかにも那須・雲源寺の高峰顕日の隠遁を旨とする禅が東北に果たした役割は大きいようである、高峰顕日の門下では福島の高山禅寺が大同妙詰によって14世紀の半ばに創建されている）禅宗の布教は14世紀も後半になってから、急速に広まっているようである。このことはまだ十分には検討していないが、信仰と宗教の間で問題が大きいようである。後に示すように、特にこれを契期に仏像彫刻の様相が一変することを考えれば、その内面的な問題も重要である。
- 註20 これら正法寺関係の諸像については、註1の参考文献参照。
- 註21 田舎または、都塵を離れた地。この発想自体が都人の発想である（少なくとも田舎人の発想ではない）点は注目される。
- 註22 ここで認識する主体は都の禅僧であり、現世利益を求めた在地の人間達ではない点は重ねて注意すべきである。
- 註23 禅の本来の姿を考えれば、修行場（寺）を開くものも僧自身のためで、周囲の人々のことは一応棚上げにされている。
- 註24 すなわち、受手である田舎の側からすれば（この意味は従来のものとその点で既に異なっているのであるが）、そのなかで従来の「信仰」の形である「寺」に類似した形で、突然都の（洗練された）文化が持ち込まれた所に大きな問題があったのではないだろうか。当然ではあるが、より古い形態を持った寺院がその後すぐに滅びてしまったわけではないが、仏像の造形に関していえば、この変化が仏像そのものの造形に関して新しい価値観をもたらし、古い造形観は急速に衰えていった様に思われる。但し、室町期以降の都の仏像の様式そのものの展開からすれば、この後の展開はやや鄙びた様式が取り入れられる様なところも見られるから、ただちに田舎の側だけが変容したということも出来ないのかもしれない。
- 註25 無底良韶の段階の正法寺の様子についてはよく判らないところが多いが、他の「林下」の寺院の例でも、草創から十数年かかってようやく「叢林（寺院）」となっている例が知られ、必ずしも正法寺が遅々として造営が進まなかったというわけではないようである。あるいは、当初は「林下」の思想に忠実に、修行の場であったものが、それが恒常的になるにつれて、「叢林」と化していく様子を示すのであろうか。また、この段階では月泉が岩手沿岸の出身であることも大きな要素であろう。註1、註2の論考参照。
- 註26 註1の文献参照。
- 註27 その最大のものは、当然ながら在地豪族の経済的援助で、この点は従来の寺院とそれ程変化がないのであるが、その精神的な背景（以前は支配民と共同のシンボルとして存在したであろう寺院が、以後は自分の文化的水準などのために存在する様になってくる）が大きく変わっていることは重要である。ただし、このころの在地豪族についていかに考えるかはなかなか困難な問題である。すなわち、平安末期の勢力が鎌倉政権によって払拭された後の北東北の支配の実態は今一つ明確でないからである。従って、ここでは単に平安末期と鎌倉期の豪族が異なることのみを示しておき、後考に待ちたい。ただし、この頃の豪族の土地の配置換えによって、仏像が持ち運ばれた例として、岩手県では江刺市の松岩寺の阿弥陀如来立像（嘉暦3年1328銘）は注目されるものである。
- 註28 かつては主導したのはたぶん豪族かその下の民であろう。なお、註27の豪族の問題は無視できない。
- 註29 この仏師側からの僧侶に対するアプローチの可能性は、関東の林下の僧に関して、「元」からの直接的な資料を彼ら入元僧が所有していたことによる可能性を先に指摘した。註2参照。
- 註30 「江刺の仏像」による。
- 註31 註27参照。
- 註32 「開山」としてその師である月泉良印が記されているのは師を勧請した例であろう。この様な例は禅宗の多くの寺が持つところである。

註33 月泉については、既述のように仏師立増との関係でも、正法寺の仏殿の釈迦三尊像を始めとする造像からそのつながりの深さが知られる。また、月峯は正法寺の第五世（輪住）（『正法年譜住山記』）であり、月泉の高弟である。それゆえ、この関係が宝城寺の造仏を生んだ可能性が強いと思われる。但し、正法寺関係の豪族で月泉の後援を行った豪族で、自ら寺を造り、正法寺の造像に携わった仏師立増の造像をした仏像を持つ例が、江刺市の光明寺にある。光明寺の地藏菩薩坐像は応永9年（1402）10月に平満家を檀那として造像されたものであり、仏師立増が造像に当たっている。尊像が禪宗とは直接関わらない地藏菩薩像である点も見逃せない。この時点ではかなりの人々が既に嘗ての自らの造形観で造像された仏像から離れていることが知られるのである。もっとも、それも下からの変化と言うよりは光明寺に見られるように、豪族層からの変化である点は重要で、後に「菩提寺」というものが寺の経済にとって重要になる変化の兆しをこの辺りに求めることも可能であろう。

註34 乗円については上原昭一「十四世紀仏像彫刻の展開と仏師乗円」仏教芸術85 1972、若林繁「福島県の仏像～盆地に息づく仏たち」『仏像を旅する 奥羽線』至文堂1989、同「福島県の仏像～中通りの仏像」『仏像を旅する 東北線』至文堂1990他参照。

付記 脱稿後、天台寺の太鼓内部の天中9年1392の張替銘の発見は、太鼓銘中の僧名が江戸中期再興の天台寺鐘銘に一致し、鐘銘の信頼性を一気に高めた。ここに漢詩等を記している臨済僧で久慈長久寺の開基義山明恩は、中峰明本の孫弟子で、林下の禅風に属する僧と思われる。後の久慈氏と九戸氏の関わりを併せ考えると、論考中の長興寺像の造像に義山が関わった可能性も考えられ、造像は14世紀末頃の臨済禅によるものとも考えられる様になった。詳細については機会を見て考察したい。

（1991年1月28日）